

日本人はどうして英語を話すのが苦手なのか  
—歴史的背景と英語の方言における発音の観点から—

W.

はじめに

本レポートでは、どうして日本人は英語について苦手を感じる人が多いのか、英語の教育関連の歴史的背景と方言における英語の発音の2つの側面から分かることについて取り上げる。なぜこの話題にしたかという、英語は世界共通語であるが<sup>(1)</sup>、国によっては日本人の英語が上手く伝わらないこともある。また、ネイティブスピーカーの英語が聞き取れないということも少なくはないのではないかと考えたからである。

先行研究としては、日本人の英語の特徴については研究が進んでいる状況である。例えば、「イメージ(image)」のように日本語化された外来語<sup>(2)</sup>に親しみを持ってしまっていることが、日本人が英語を話すのが苦手だと感じる大きな原因があるとされている。だが、ここで疑問に思ったのは、日本人が英語を話すのが苦手な根本的な問題とは何かということと、発音や日本語化された外来語以外にも何か原因があるのではないかとということである。この2つの疑問について考えていきたい。また、英語教育などで標準モデル化されてきたイギリス英語の一つ、RP<sup>(3)</sup>にも触れながら考えていきたい。

### 一、歴史的背景から影響する日本人の英語

それでは、一体なぜ日本人が英語を話すのが苦手と感じているのか。まずは歴史背景から考えていきたい。元々、英語が日本に入ってきたのは16世紀頃(江戸時代)からであった。ところが、本格的に英語教育が始まったのはその約200年後の1809年頃であると言われている。なぜ時期が違うかというと、17世紀にあった鎖国時代が大きな原因である。当時はオランダと貿易を行っていたため、蘭学<sup>(4)</sup>が盛んであり、オランダ語しか学ぶ必要がなかったと考えられている。当時の日本に英語は必要なかったのである。鎖国が終わり、英語教育が始まった頃、当時の日本人は英語を話すことが出来なかった為、教師も英米人が行っていた。当時の教育は現在の教育とは違い、全ての教科が英語で行われていた学校<sup>(5)</sup>もあり、まさにアメリカの学校の分校であると言える。エリートが集まるような学校であった。だが、ここで、新たな変化が生まれたのである。それは文明開化の時代に

(1) 世界中どこに行っても通用する言葉。

(2) 外国語から取り入れられて同化し、自国のように使われるもの。ガラス、コップが主な例。

(3) 容認発音とも言う。イギリスの上流階級が主に使っていた語。

(4) 江戸中期以降、オランダ語によって西洋の学術・文化を研究した学問。

(5) 明治八年末に設立された札幌農学校の事である。

起きた。英語教育が庶民に広まったのである。その影響は、英語の都々逸<sup>(6)</sup>が作られるほどになった。もちろん、たくさんの人に広まるのは良いことのように感じる人も多いだろう。だが、ここで問題が起こった。英語の学習書<sup>(7)</sup>（特に一般大衆向けのもの）の氾濫と英語の教育の質的低下である。教育制度は大きく変わり、教師は英米人から日本人へ変わり、英語学校も当初よりも数を減らすことになった<sup>(8)</sup>のである。そして、当時の政府の伊藤内閣<sup>(9)</sup>は「教育の国語主義化」を行った。その影響で、「発音無視・訳読中心」の現代のような英語教育になり、やがて、受験英語のような文法中心の授業を受けることになった。このように、英語を母語とするような英米人からの生きた英語を学ぶ機会が少なくなったことが日本人の英語を話すのが苦手になった一つの大きな原因であろう。

## 二、英語の方言とイギリス英語の例

次に、英語の方言における発音から影響する日本人の英語について考えていきたい。前提として、標準的なイギリス英語を取り上げる前に、英語の方言について述べる。だが、「英語の方言は存在するのか」と考える人も多いのではないだろうか。英語は元々1500年の歴史<sup>(10)</sup>があり、多少の影響の違いはあるがラテン語、フランス語などの様々な言語と接触することになった事によって発音、文法、語彙など変化していったのである。他にも住民の社会的な要素（年齢、性別、職業など）や当時の環境など原因は様々だが、英語の方言は多く存在しているのである。ところが、他の国によっては訛り等の違いがある。そこで、今回は英語の方言の一つ「イギリス英語」からRPについて考えてみたいと思う。

RPは元々、宮廷を中心に使用されていたアクセントの種類である。16世紀から上流階級に広がり、その後19世紀になると多くの人に広がっていったと言われている。どうしてこのアクセント方法を取り上げたかという点、このRPの長所にも当てはまるのだが、世界の多くの国が外国語教育・第2外国語教育<sup>(11)</sup>において学習対象の標準とされているからである。一般的なRPを例に挙げると、母音の直後では/r/は発音されないということである。ところが、最近ではアメリカ英語の影響によって、イギリス英語のRPに少し変化が生まれた。これにより、規則性の面で変わってきたと言われている。つまり、英語の方言は存在するのである。イギリス英語では発音の面で特徴がある。だが、いったいこの英語の方言が日本人の英語に一体どのように影響しているのだろうか。また、日本人はどこの部分に苦手意識をもっているだろうか。ここで取り上げたイギリス英語のRPと比較して考えたい。

<sup>(6)</sup> 当時の歌の一種。交互で七・七・七・五の四句からなっている。江戸時代の末期辺りに都々逸坊扇歌が寄席で歌って流行した。

<sup>(7)</sup> 特に明治四年から六年は一般大衆向けの入門書が大量生産された。

<sup>(8)</sup> 当時七つあった官立英語学校は東京・大阪を除く五つの学校が廃止になった。

<sup>(9)</sup> 伊藤内閣…当時の伊藤博文内閣。

<sup>(10)</sup> 英語の起源はインドヨーロッパ語とされている。

<sup>(11)</sup> 自国が話す言語ではないものが外国語。例えば日本人は日本語を話すので、英語は外国語である。第2外国語とは日本語を除いて2つ目に習う言語である。

### 三、イギリス英語の比較から見る日本人の英語

それでは、イギリス英語と日本人英語を比較してみたいと思う。その前に、日本人の英語の特徴は一体何かを考えたい。先行研究の方にも少し挙げたが、日本人の発音には特徴的なものがある。それは4つ挙げられる。1つ目は、一部の発音が区別しにくいということだ。例えば、[l]と[r]、[θ]と[s]、[b]と[v]などの区別である。また、母音の細かな部分も聞き取りにくく、話すのも難しく感じやすい。2つ目は、日本語の音節構造にある。ローマ字を思い起こしてみたい。例えば、「か」をローマ字で表現してみると「KA」となる。日本語の音節構造は「子音<sup>(12)</sup>+母音<sup>(13)</sup>」という組み合わせが多い。日本語は、子音群の間に母音を挿入する傾向が見られるのが特徴的である。3つ目は、外来語（和製英語）である。日本語化された外来語は、英語の母語話者にとって理解しにくい。それは発音が変わってくるからである。また、日本人の間で用いられる和製英語も、彼らにとっては理解されにくく伝わりにくい。4つ目はリズムについてである。日本人の英語は強勢によるリズムではなく、音節によるリズムである。この4つの特徴から日本人の英語の特徴が見えてくるだろう。

では、RPと日本人の英語の特徴を比較して、どうして英語を話すのが苦手に感じるのかを考えたいと思う。大きな理由は、RPの特徴的な[r]の発音が苦手であるということだ。日本人の英語の特徴として、[r]と[l]の区別がつきにくいということも挙げたのがまさに当てはまる。つまり、日本人にとって英語は話しにくく、聞き取りにくい音があるのが分かる。

### おわりに

今回の研究を通して分かったことは、日本人が英語を話すのが苦手な理由は、過去の教育制度と、日本語の音節構造など様々な原因があることだ。教育制度からは、米国人などのネイティブスピーカーに様々な分野の教科を教わる授業から、現在のような訳読中心の授業に移り変わった部分が影響していた。また、英語の方言からは、今回RP（イギリス英語）を取り上げた。そこでは、やはり日本人には発音しにくい音があるのが分かった。この2つの観点から考えると、次のことが言える。日本人が英語を話すのが苦手を感じる根本的な原因は、英語の発音がしにくい音があるものの、英米人のようなネイティブスピーカーに教わる機会がなく生きた英語を習う機会が減ったことにあると考えられるということだ。日本では国際化が進み、英語の上達を図るために、小学校から英語の授業<sup>(14)</sup>を取り入れられている。ところが、突然の英語教育のスタートに、小学校教師はとまどっているに違いない。授業年数を増やすことだけに重点を置いているようにも見える。果たして、英語を話すことを苦手とする子供は減少するだろうか。私は、今後の英語の教育内容も十分に吟味していかなくてはならないと考える。

なお、今回の研究はまだ調査すべき課題である。英語の方言は、今回取り上

(12) 発音する際に、声帯の振動で生じる呼気が発音器官によって妨げられる音。

(13) 発音する際に、声帯の振動で生じる呼気が発音器官によって妨げられない音。

(14) 小学校の高学年(5,6年生)の必修化が2011年から行われている。

げた RP だけではない。アメリカ英語やカナダ英語などもある為、特徴も様々である。今後は、他の国の言語も調べたいと思う。そして、留学経験を通じて、実際に英語の発音の違いを経験しようと思っている。また、今回の研究を通して、英語の教育制度は他の国にはどんな特徴があるのかも疑問を感じたため、少し範囲を広げて考えていきたい。

#### 参考文献

- 1、武本昌三、1971年11月30日発表 『アメリカ英語方言概観』  
小樽商科大学学術成果コレクション
- 2、武本昌三、1976年12月25日発表 『イギリス英語方言概観』  
小樽商科大学学術成果コレクション
- 3、畑中孝、高田諭、富士裕、小竹ヘザー、1984年4月10日出版  
『英語のバリエーション』南雲堂
- 4、岡野哲、2000年3月31日発表 『ことば・言語のあり方：「言語と文化」考(3)』  
北海学園学術情報リポジトリ
- 5、斎藤兆史 2007年10月1日出版 『日本人と英語—もうひとつの英語百年史』研究社
- 6、田中晴美、田中幸子、川村陽子、今村洋美、菱田治子、後藤いく子、大石晴美  
田中晴美、田中幸子編集  
2012年7月10日 『World Englishes 世界の英語への招待』 昭和堂
- 7、英語雑貨屋、「英語の発音を徹底解明する English」  
<http://www.rondely.com/zakkaya/hatu/br.htm>、2013年7月14日